学部再編で推進さらに

1

学園では「まちづくりでひとづくり」を大きく標榜している。その基底には、「安城学園の仕事は、『まちづくりのためのひとづくり』だ」という強い信念がある。そして、「まち」をつくり「ひと」をつくるため、地域社会を〝生きた学びの場〟として、積極的にまちづくりに参加し、そうした姿勢のもと、「社会人基礎力」を地域の中で育てることを図っているのである。

それゆえに、学園では社会人基礎力育成への取り組みを、大学のみならず、学園全体の取り組みとして全学的に推進しているのだ。

愛知学泉大学　若林努学長

こうした中、大学では、これをさらに深化させる取り組みを図ることにした。

＊

大学では、「社会人基礎力」を平成十九（二〇〇七）年度にその教育のなかに試行的に取り入れ、平成二十（二〇〇八）年度からは体系的な社会人基礎力育成の一環として潜在能力発揮

教育プログラム「無限の可能性」を三カ年計画で推進していたが、今年度（平成二十二年度）はその最終年度を迎えることになった。大学では、ここに活動をさらに見直し、どの学生でも申し込みが可能な特別奨学生制度を設けた。

大学生向けの奨学生制度は一般に日本学生支援機構や一部の大学が設けるものがあるが、多くは学資補助を目的とした貸与制度によるもの。だが、これは、「自身の無限の可能性」に積極的にチャレンジする学生を支援するための、新しい自己チャレンジ型の特別な奨学生制度だ。

入学時に申請し、その半年後に審査して基準をクリアすれば、特別奨学生となる。支給額は年間最大二十八万円。四年間で最大百十二万円が支給（返還不要）される。

「四年間支給されれば、学生の動機づけにもなるし、家庭にとっても経済的な負担が減るだけでなく、我が子の活躍が見えるなどメリットは大きい」

若林努学長は、この奨学生制度の多角的な効用を評価する。

そして、迎える平成二十三（二〇一一）年度、安城学園の「社会人基礎力」育成は、「新たな可能性」を目指してより発展的に、深化することになった。

新学部「現代マネジメント学部」（現代マネジメント学科）の開設だ。

2

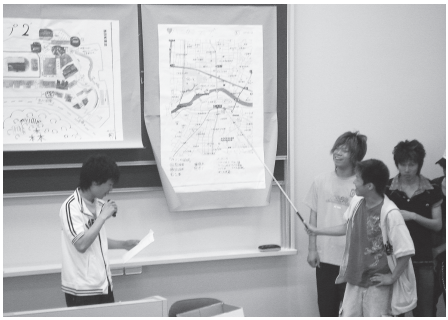
愛知学泉大学はその頃、岡崎キャンパスに家政学部、豊田キャンパスに経営学部、コミュニティ政策学部を擁した。その中、新設される現代マネジメント学部は、既存の経営学部、コミュニティ政策学部を融合するものだ。

家政学部は昭和四十一（一九六六）年、経営学部は昭和六十二（一九八七）年、コミュニティ政策学部は平成十（一九九八）年にそれぞれ設置された。営々と築いてきた三学部体制をなぜわざわざ融合して二学部とするのか。二学部を融合した新学部とは一体どんな性格のものなのか。

「新しく誕生する『現代マネジメント学部』では、『ビジネスセンス』と『コミュニティマインド』を兼ね備え、問題解決のためのマネジメント能力を身に付け、地域に貢献できる人材を育成する」

若林努学長および学部長に予定された高橋真教授は、新学部の教育目標をこう明言した。

愛知学泉大学がこのロジックを見いだし、教育目標を具体化させるためには、現代に対する深い考察があった。



基礎ゼミ報告会

繰り返すが、学園は従来から、「くにづくりのためのひとづくり」も大事であるが、「まちづくりのためのひとづくり」も大事であるという方針の下、「私たちの仕事はまちづくりである」というスローガンを掲げてきた。

その中、これまで経営学部は〝地域産業の活性化に貢献できる人材〟を育成するために、コミュニティ政策学部は〝地域社会の活性化に貢献できる人材〟を育成するために、それぞれの専門的知識・技術を身に付けて「まちづくりのためのひとづくり」を目指す教育研究活動に取り組んできた。

しかし、その中にあって、教育の実態は少なからず省みられるところがあった。

経営学部では営利組織のマネジメントに関する学習、コミュニティ政策学部では非営利組織のマネジメントに関する学習が中心であり、それぞれ独立した形で教育研究活動が行われていた。そのため、経営学部の学生の中でコミュニティを学習したい者、コミュニティ政策学部の学生の中で企業経営を学習したい者があっても、そのニーズが十分に満たされない傾向があったのだ。

3

いま時代は急速に多様化している。現代社会が直面している様々な問題を解決するには多様な〝マネジメント能力〟が求められる。

経済活動の担い手である企業に対してはこれまで以上にコンプライアンス（法令遵守（じゅんしゅ）の管理体制）

やＣＳＲ（企業の社会的責任）への対応が欠かせないものになってきており、企業のみならず、行政・ＮＰＯ・地域社会等々でも地域の問題解決に企業の経営手法が必要とされ、さらに家庭・個人にあってもそれぞれのマネジメント能力が求められている。

また、現代社会では単独で解決できる問題は少なく、協力・協動によってなされていく場合が多い。地域の活性化という課題についても、それにかかわるのは自治体や企業だけでなく、地域社会・コミュニティ・ＮＰＯなど多方面の協力・協動がなければ実現はむずかしい時代になってきている。そのためのマネジメント能力も同時に求められている。

愛知学泉大学の講義

こうした認識のもとに考えを及ぼす時、自治体・企業・ＮＰＯ・ＮＧＯ等々、さらには家庭・個人の段階においても、それぞれに問題解決のためのマネジメント能力を身に付ける必要がある。そしてその上に求められるのは、お互いに協力・協動してより良い地域社会を形成していくことである。

学園では、こうした「まちづくり」のための人材を育成することをさらに目指したのだった。

こうした時代背景を勘案した学園では、社会人基礎力を一つの柱にした教育プログラム『無限の可能性』の開発―というこの教育改革を推進していく上で、豊田キャンパスで経営学部とコミュニティ

政策学部の二学部体制で独立して教育するよりも、融合して一学部体制で教育する方がより効果的であると考えた。

新学部では経営学についての専門知識・技術を背景にした「ビジネスセンス」とコミュニティ政策学についての専門知識・技術を背景にした「コミュニティマインド」を兼ね備え、マネジメント能力を身に付けた人材を育成することをねらったのだ。

4

〝新学部において育成する人材像〟は、いわば〝複眼的な視野を持つ人材〟、それは「まちづくり」に十分貢献し得ると確信づけられた。

ここに、大学では豊田キャンパスを「地域社会のデザイン」をモチーフとした教育研究活動の拠点と位置づけるとともに、既存の二学部を融合して、「現代マネジメント学部」を設置することにしたのだった。

大学では、その布石とともに、「ライフスタイルのデザイン」と「地域社会のデザイン」の両方が必要であるとし、岡崎キャンパスは「ライフスタイルのデザイン」をモチーフとした教育研究活動の拠点と位置づけ、岡崎、豊田の両キャンパスを車の両輪のように機能させることにした。

ねらうは、「幅広い職業人の育成」、「総合的な教養教育」、「社会貢献（地域貢献、産学官連携、

国際交流等）」という三つに焦点を当てた〝地域貢献大学〟だ。

＊

現代マネジメント学部は、その教育目標から、地域社会にかかわる多様なマネジメント能力とともに、「基礎学力」「専門知識・技術」「社会人基礎力」を統合的に身に付けるための教育実践にも力を入れる。

ちなみに、年次ごとの学習目標と特徴は、

◆一年次＝基礎教養とともに現代社会の課題とマネジメントの基礎を学ぶ。／「基礎学力」「専門知識・技術」「社会人基礎力」を統合的に身に付けるために、『問題解決基礎』で「社会人基礎力」に対する意識付けを行い、問題解決に必要な基本スキルを習得する。

◆二年次＝地域社会とマネジメントに関する専門的な知識・技術を学び始め、簡単なＰＢＬ（プロジェクト・ベースド・ラーニング）に取り組む。／「基礎学力」「専門知識・技術」「社会人基礎力」を統合的に発揮させて問題解決能力を育成する。

◆三年次＝地域社会とマネジメントに関するより専門的な知識・技術を学び、専門ゼミナールなどで問題解決学習を行う。産学・官学連携ＰＢＬにも取り組む。／「基礎学力」「専門知識・技術」「社会

トヨタグループ関連企業の工場見学

人基礎力」を統合的に発揮させて高度な問題解決能力を育成する。

◆四年次＝これまで学んだことの集大成として卒業研究に取り組む。卒業に必要な科目は原則三年次まで修得可能だが、さらに単位を取得して教養を広めたり、専門を深めたりすることができる。（新学部パンフレットから要約）

5

事業継承者、会計専門家、会計・財務担当者あるいは地方公務員、文化・スポーツ団体職員、非営利団体組織運営スタッフ等々、現代マネジメント学部の学生たちはこうしたステージを求めて、そのために必要な能力・知識の習得に励むことになる。

身につける可能性は、学部案内のパンフレットにも標榜されるように、いくつかのキーワードに密接につながっている。いわく、［ビジネスセンス］［マネージャー］［仲間］［まちづくり］［地域］［グローバル］［エンターテインメント］［起業家］［情報技術］［スポーツ］［未来］［夢］―。

安城学園の「無限の可能性」プログラムは、これら「新たな可能性」を目指してより発展的に、深化することになるのである。

＊

「現代マネジメント学部」―名称も耳新しかった。

学部名称には時代の変遷がある。その移り変わりを、寺部曉理事長はこう表現する。

「学部名称は、もともと文学部、法学部、工学部、理学部…というように漢字一字で表された。それが、理工学部というように漢字一文字のものを合成したのが、学部名称の変化の第一期。戦後になると、経営情報学部、国際関係学部のように二つの概念、目で見ると二文字の漢字を合わせた四文字が使われ、次にカタカナが入ってきた。例えば、情報コミュニケーションというように、漢字とカタカナ混じりの学部名が出てきた」

そういう意味では、「現代マネジメント学部」は当世風のネーミングであった。

しかし、寺部理事長は強調した。

「経営学部を現代マネジメント学部とカタカナ混じりにした事例はある。だからといって、安城学園の現代マネジメント学部もそうであるというものではない」

新学部は経営学部を単に言い換えたものでないのだ。

「現代マネジメント学部は、経営学部とコミュニティ政策学部をベースにして創るのである。だから、両方の良いところ、追究するところ―すなわち『ビジネスセンス』と『コミュニティマインド』を兼ね備えた人材を育成するのが新学部の狙いで、1＋1＝2ではなくてプラス・アルファーを図るものである」と。

チームで環境問題に取り組むエコキャップサークル

寺部理事長は、新学部の特徴を、学部の学問領域が社会学と経済学の二分野に及ぶ融合のものであることを強調した。

ここに、あえて二学部を一学部に融合した意図があった。

6

「経済産業省の場合、社会人基礎力の説明では、『私たちが職場や地域社会で働く上で必要な能力です』と書いてある。ところが、安城学園でそれを翻訳すると、もう少し幅広く解釈できる。つまり、共通の目標があって、それを複数の人間で実現したい、あるいは実現しなければならないという場面で、従来の教育の基礎学力と専門知識だけでは足りない。では何が必要かといった時に出てきたのが、社会人基礎力。だから、共通の目標を複数の人間が実現をするときに必要な能力として、この社会人基礎力を位置づけて導入したのである」

導入を主唱した寺部理事長は、その動機づけをこう語った。

この共通の目標を複数の人間で実現するという組織・チームはコミュニティそのものである。こう考えるとき、個人単位で生み出さ

企業の担当者を招いて開催する企業説明会

れる能力が、組織単位でも同じように使うことができる。それが「ビジネスセンス」と「コミュニティマインド」を兼ね備えた人材によって達成できる。学園ではこのように発展的にとらえたのである。

安城学園では、従来、基礎学力と専門知識を主にしてきたが、これに新しく社会人基礎力でいう「主体性」とか、あるいは「発信力」等々という〝行動特性〟を加えた。単に、社会人基礎力を入れるのではなくて、一人ひとりの潜在能力を開発するためだ。

「社会人基礎力」という概念は、もともと経済産業省で生み出された。しかし今、安城学園では、その原理・原則をとらえながら、独自にそれを大きく発展させているのである。

学園は生きている。安城学園は〝成長〟をしているのだ。

安城学園は今、大学での新しい布石を核に学園各設置校全体に新たな教育の展開を図る。それは、まさに教育のイノベーションである。